

第1章 文化振興ビジョンの考え方

1. 文化振興ビジョン策定の背景

「ものの豊かさ」から「こころの豊かさ」へ

戦後、わが国は、戦災復興から高度経済成長を経てめざましい発展を続けました。その結果、世界有数の経済大国になり、わたしたちの生活も経済的にはたいへん豊かになりました。

ものの豊かさについて一応の成果が出たころから、これからは心の豊かさの時代だと言われはじめました。そのひとつのきっかけは、昭和48年(1973年)のオイルショックです。右肩上がり成長を続けた日本経済が、これを分岐点として低成長時代へと入っていきました。

経済成長を追い求めた結果、失ったものも少なくありませんでした。公害問題がその典型です。豊かな自然環境は破壊され、身近にあったはずの歴史的環境も大きく姿を変えてしまったのです。

そうした時代の変化を受けて、これからは「こころの豊かさ」を追い求めていくことが大切だと思われ出したのです。「量から質へ」「ゆとりの時代」「うるおいのあるまちづくり」こうしたキーワードが社会づくり、まちづくりのなかで使われました。

こうしたなかで、「こころの豊かさ」を実現するもののひとつとして「文化」が注目されたのです。

しあわせさがし・自分さがし

モノからココロへ、それが個人レベルであらわれたのが、しあわせさがしです。ものを所有するというだけでは確かに豊かになりました。しかし、それ以上に心の充実感を欲しはじめたのです。

モノの量的な側面では「ゆたかさ」という言葉が適切です。しかし、ココロの充足には「しあわせ」という言葉のほうがふさわしいのではないのでしょうか。豊かにはなったけれど、しあわせだろうか。そうした問いかけがなされはじめました。

仕事に一生懸命、それだけで本当にいいのだろうか。仕事よりも大切なものもあるのではないか。企業戦士と呼ばれた仕事一途人間にも、そうした疑問がわきはじめたのです。

仕事に熱心なことは決して悪いことではありません。しかし、だれのため、何のために仕事をしているかによって、その評価は異なります。いわゆる「仕事のしがい」あるいは「生きがい」が問われるようになりました。

価値観の多様化と相対的価値観

仕事だけが人生じゃない。もっと多様な生き方があるのではないか。こうした人生観や価値観の多様な時代になってきたのです。個人の価値観を基礎とした多様な生き方、生活様式が展開される社会が到来したと言えます。

こうした多様な社会では、異なる価値観をお互いが認め合い、お互いを尊重していく態度が必要とされます。また、お互いの違いを議論によって調整することも必要となってきます。まちづくりでも最近は「協議型まちづくり」の時代へ入ったと言われています。

個人の楽しみを基本とする文化では、こうした多様性を認め合い、共生していくことがつとめて大事です。

時代の転換期

絶対的な価値観が崩壊した時代。現代は、まさしくそうした時代の転換期なのです。国際社会では東西冷戦構造の崩壊、国内でも政治面での自民党一党独裁のいわゆる五十五年体制

からの転換、等々、国内外でさまざまな変化が起こっています。今までの流れからこれからの時代を推し量ることがむずかしくなっています。

こうした混迷の時代に、私たちはどのように対処すればいいのでしょうか。1998年1月1日付毎日新聞は、次のような社説を載せています。「私たちは迷いながら、手探りで進むしかない。見えにくい未来を前にして立ちすくむのではなく、それに立ち向かう心が欲しい。〈世の中はどうなるか〉ばかりを気にするのではなく、どう〈する〉のか、どう〈したい〉のかを自分に問い、自分の意志で歩み始める時である。」

これからは、世の中の流れに身を任せるのではなく、みずからの意志で自分の生き方を見出ししていく時代になったと言えます。

文化の心を持ったまちづくりを協働で

私たち一人ひとりが、自分の意志を持ってしっかりと生きていく。そうした積極的な姿勢が求められます。これから自分はどうしたいのか、どのように生きていくべきかを問いつつ、しっかりと生きていくことが大切です。モノの豊かさではなく、ココロのしあわせを求めつつ、一人ひとりが自分の生活や人生を選択する。そうした時代になったのです。

こうした確固とした生活が積み重なり、まちづくりへとつながれば、一人ひとりの生活を大切にしたい人にやさしいまちづくりが展開できるはずです。個々人の生活や考え方の相違でもめることもあるでしょう。しかし、その違いをお互いが認め合い、その上で議論によって調整を図っていく、そうした態度が大切です。

みんながお互いを尊重しつつ、協力しながら、文化の心を持ったまちづくりを進めていくことが求められます。

2. 文化振興ビジョンがめざすもの

(1) 文化的まちづくりの考え方

文化を生活・まちから捉える

八尾市には現在28万人近い人が住んでいます。八尾で働く人、八尾で学ぶ人を加えると、もっと多くの人八尾のまちと関わりを持ちながら生活しています。そのすべての人たちがしあわせを実感し、生きる喜びを感じるまちこそ「文化的なまち」だと言えます。

文化と言えば、芸術文化や歴史文化、といった内容がすぐに頭に浮かびますが、この文化振興ビジョンでは、広く生活文化全般を取り扱いたいと思います。生活やまちに密着して文化のあり方を考える。そうした姿勢で、文化と生活、文化とまちの関係を考察し、八尾市におけるこれからの文化のあり方を考えていくことが、この文化振興ビジョンの目的のひとつなのです。

文化を切り口として一人ひとりの生活を見つめる、また、それらが積み重なってできるまちのあり方を考えること、それが「文化的まちづくり」を考えることです。生活と密着したあらゆる場面で文化的であることを求めることが、文化的まちづくりを進めることだと言えます。

楽しみからはじめるまちづくり

「まちづくり」と言えば、これまで行政がやるもの、むずかしいものというイメージがあったのではないのでしょうか。まちは私たちのさまざまな営みがつくり出していくものです。そうした面では、みんながまちづくりに関わっています。暮らしがまちをつくるのです。

日々の暮らしのなかからまちづくりを考えていく。確かにまちづくりには難しい面、つらい面もあります。しかし、楽しいまちづくりのあり方も考えれば、みんなが気軽にまちづくりに参加できるのではないのでしょうか。また、楽しいほどまちづくりも長続きします。

文化は個人の楽しみからはじまることが多い、そうした文化の楽しさを手がかりにまちづくりを考えていくことが大切です。また、個人的な文化をまちのみんなで共有することで、文化が地域の文化へ、そして、まちづくりへ展開していきます。

そうした文化とまちづくりの関係を考え、これからの文化のあり方を考察していくことも、文化的まちづくりの観点であり、この文化振興ビジョンのめざすべき方向なのです。

文化を創り出すまちづくり

これまでの社会はモノの充足を求めることを中心に発展してきました。そのこと自体は決して悪いことばかりではなく、安全性、利便性といった面では飛躍的な進歩を私たちにもたらしました。しかし、そのなかで失ったものも少なくありません。

人と人がともに生き、感動、ときめき、ふれあいを共感できるまちづくりが求められています。「文化」をキーワードにさまざまな課題を整理・分析し、まちづくりのあらゆる施策の中で「文化」の視点を意識することが、今後のまちづくりには必要です。

文化をまちづくりにつなげていくことだけではなく、逆に、まちづくりから文化を創造する、そうしたまちづくりのあり方を考えていくことも必要です。

以上のような観点を大切にして、この文化振興ビジョンでは、文化とまちづくりのあり方を考える、また、文化を手がかりに私たちの生活やまちづくりのあり方、これからの方向性を考えていきたいと思えます。

(2) 市民と行政の二重奏

従来のまちづくりは、どちらかという行政が主体となり行っていく色合いが強かったと思います。行政のほうもそれがあたりまえという雰囲気がありましたし、市民のほうも税金を納めているのだから行政がまちづくりを行うべきだと思う傾向がありました。

しかし、本当にそうでしょうか。行政主導のまちづくりは、ともすれば行政が勝手にやってしまうことにもつながりかねません。また、暮らしの営みがまちをつくるのであれば、まちづくりについて市民がなすべきこともあるはずです。

もう一度、市民と行政の関係を考え直す時代に来たのではないのでしょうか。特に、地方分権のあり方を考えるなかで、市民と行政の関係性を問い直すことが重要になってきています。

市民と行政の関係そのもの、協働作業のあり方そのものの文化性を問い続けなければなりません。この文化振興ビジョンの策定過程でも、市民と行政がどう協働できるかをひとつのテーマに作業を進めてきました。まだ十分とは言えませんが、そのなかで多少とも見えてきたものもこのビジョンの中に散見できるはずで す。また、このビジョンの策定過程そのものが、市民と行政が協働して計画づくりを行う、そのひとつの試みなのです。

文化を個人的なものからパブリックなものにしていく、そして、市民、行政がそれぞれの主体性を持ちながら協働し、素晴らしいハーモニーにつつまれた二重奏、三重奏を奏でることが必要です。このビジョンの議論をさらに発展させ、市民と行政のデュエット、トリオ、カルテット、クインテットの可能性を求めることも、この文化振興ビジョンがめざす柱のひとつです。

3. ビジョンの構成と使い方

ビジョンの構成はつぎのようになっています。

この第1章では、ビジョン作成の背景やビジョンの基本的考え方を述べてきました。

つづく第2章は、ビジョンの核となる部分です。このビジョンを手にしたみなさんは、この部分をしっかりと読んでいただきたいと思います。ここでは、文化振興の考え方、基本方針、文化に接する姿勢など、文化振興懇話会での議論を43のキーワードに示しています。キーワードの下にはキーワードの説明を書いています。

しかし、何をどのようにすればいいのかは具体的に示していません。それに物足りなさを感じる方もいるでしょう。このビジョンをまとめた私たちがめざしたのは、文化振興のための具体的な方策を考えることではなく、文化振興の根底にある文化観や文化との接し方などについて考えることでした。

第3章には、さらなる八尾の文化振興を図るために必要なことがらの体系の骨格を記しておきました。今後どんなことが必要か、それを考えるための手がかりが書かれてあります。これを読んで、自分なりの文化振興方策を模索していただきたいと思います。

振興方策は人それぞれであっても、それがこのビジョンに書かれた基本姿勢、基本精神にもとづいて行われたものであれば、けっして違った方向にはいかないと 思います。協働とは、みんなが同じことをするのではなく、立場の違う人々がそれぞれ自分なりにがんばる、その積み重ねがひとつにまとまっていくことなのです。その方向性を指し示すことがこのビジョンの大切な役目なのです。

第2章 文化的なまちづくりを

第2章を読むために

第2章は、ビジョンの核となる部分です。前章にも述べていますが、この部分をしっかりと読んでいただきたいと思います。

ここでは、文化振興の考え方、基本方針、文化に接する姿勢など、文化振興懇話会での議論を43のキーワードに示しています。キーワードの下にはキーワードの説明を書いています。

第2章に書かれてあることがらを具体化し、さらなる文化振興を図る為には何をすればいいのか、何ができるのかを考えていただきたいと思います。

1. 文化振興ビジョンで何をするのか

基本的に文化は個人レベルの問題かもしれませんが、しかし、地域文化を考えるときには、地域に暮らす人々が共有し、手を取り合ってさらなる文化振興につなげていくことが重要です。

八尾の文化を考える

八尾の文化、とあらためて問われて考えることも少なくありません。普段何気なく過ごしては気づかないこと、あるいは、普段から行っているさまざまな文化活動の意味をこのビジョンを通じて考えてみたいと思います。

協働の文化づくりへの関わり方を考える

一人ひとりががんばるよりも、みんなで力を合わせるほうがいいこともたくさんあります。どのような協力、ネットワークのあり方が考えられるのか、また、そのためのしくみづくりはどのようにあるべきなのかについて考えていきます。

みんなで力を合わせる、それを逆に考えれば、みんなで役割分担をしていくことです。協働の文化づくり、まちづくりをめざして、一人ひとりが何をすべきなのか、どのように連携すればいいのか、行政と市民、市民と市民の役割と連携のあり方を考えます。

さらなる議論を重ねる

このビジョンは市民の有志が集まり、行政とともに協働で作成した手づくりの作品です。さまざまな立場の人が集まり、議論を通じていろいろな意見を出し合いました。その成果がビジョンなのです。しかし、これは完成品ではなく、さらに多くの市民の人たちを巻き込み、議論を続けていくことによって、さらによりよい方向性を見出したいと考えています。ビジョンはそのひとつの布石なのです。

2. しなやかな計画としての文化振興ビジョンづくり

計画はひとつの方向性を指し示します。これに則ってこれからの文化振興施策は行われていくわけですが、それをあまりにも固定化してしまうと新たな課題も生じかねません。進捗状況や時代の変化に対応した柔らかな対応が求められます。

変化に対応できるシステム

計画とは一定の方向を指し示すものです。しかし、時代の趨勢や人々の意識の変化などによって、計画どおりにものごとが進まないことも予想されます。そうした場合には、計画の内容に固執せず、柔軟な対応が求められます。

進捗状況を常に監視していく

計画の内容はいくつかの段階に整理ができます。それは「目的」や「目標」にあたる部分と「方策」に相当する部分に分けられます。「目的」は「何のために」、「目標」とは「どちらへ向かう」のかを記しています。また、「方策」は目的や目標を達成するために「何を」「どのように」「いかにして」行うのかを記したものです。

いわずもがな、大切なのは「目的」や「目標」の部分です。「目的」や「目標」に照らし合わせて、「方策」の進捗状況を常にチェックしていくことが大切です。場合によっては、「方策」を見直すことも必要です。

わかりやすさを心がける

ビジョンづくりの際にもできるだけ「わかりやすさ」を意識しました。わかりやすさとは、内容やそれを表す文章のわかりやすさだけではなく、何のためにやるのかといった意味や意義のわかりやすさ、だれがやるのかといった主体のわかりやすさなど、すべてにわたってわかりやすさが必要です。

このビジョンを受けて行われる個別の文化振興施策も、当然、わかりやすいものであることが求められます。

3. 文化をどう捉えるか

地域文化にとって重要なのは「共有」すること。それは生活のさまざまな側面、要素を「実

感」し、「共感」することでできあがります。

生活様式の「共有」が地域文化を生む

「文化」とは何か。その定義はさまざまであり、人によって解釈は異なります。しかし、地域文化としてそれを捉えた場合、そこに必要なことは「共有」ではないでしょうか。

わたしたちの暮らしにはいろいろな場面がありますが、そこには暮らし方、あるいは暮らしの様式や作法といったものがあるはずで、そうした個々人の生活様式が積み重なり、地域として共有されて地域文化となっていくのです。

個人の楽しみも共有されてこそ、地域の資源として活かされるのです。

感じる事が大切

こうした「共有」を図るには「感じる」ことが大切です。地域にあるいろいろなものを「実感」すること。そして、「共感」することができて「共有」できるのです。

文化は心の問題だと思います。私たち一人ひとりの「生」をいかに充実あるものにするか。それが文化にとって重要です。

文化とは「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。」（『国語大辞典』（新装版）小学館）つまり、私たちの生活を高めていくものが文化なのです。

文化とは生活の総体である

私たちの生活を高めていくものが文化だとすれば、それは生活全般と関わっています。生活そのもの、生活の部分部分が文化を育てているのです。

文化と言えば、芸術文化や歴史文化がすぐに頭に浮かびますが、ここでは広く「生活文化」全体を捉えていきたいと思います。

そうすることによって、文化と生活がより密接なものとなり、ひいては、まちづくりへと展開できるのです。

4. 文化を計るものさしー利便性と文化

「利便性」を考えることを通じて文化を見直すことができます。私たちの暮らしは確かに便利になりました。しかし、利便性の追求によって失ったものも多いのではないのでしょうか。文化は、「不便」や「無用の用」といったものとの関係が深いのです。もう一度、文化をどのような文化を計るものに捉えるのか、考えてみる必要があります。

文化を計るものさし

私たちの暮らしは確かに便利で快適なものになりました。しかし、利便性をあまりにも追い求めたために、失ったものも多いのではないのでしょうか。合理性や効率の追求によって、社会や生活のなかから「ゆとり」や「むだ」「遊び」といったものが少なくなってしまう気がします。

文化とは「ゆとり」や「むだ」「遊び」といったものと密接に関係しています。「文化」は、利便性や効率といったものさしとは違うものさしで計るべきものだといえます。

「無用の用」が文化を創る

「無用の用」ということばがあります。これは、役に立たないとされているものが、かえって非常に大切な役をすること（『国語大辞典』（新装版）小学館）を意味する言葉です。利便性や効率という尺度で計れば無用と思われるものでも、ゆとりや精神的充足という尺度で

考えれば、とても役に立つもの、そうしたものが「文化」なのではないでしょうか。

文化を通じて社会や生活を見直す

「文化」を考えるとき、便利さや効率一辺倒の社会や生活を見直すことが必要です。社会や生活のなかで何が大切なのか、もう一度あらためて考えることが、文化振興を考える大切な視点なのです。

手づくりの喜び

時間がかかっても、プロがやるようにうまくいなくても、自分でものをつくる、何かをやってみることで、つくり出す喜びや充実感が得られるはず。これは、できたもののできばえで評価しているのではなくて、その過程を楽しむ、自分でやったことへの満足感を求めることに意味があるのです。

また、こうして手づくりでつくられたものには暖かさを感じるものです。まごころのこもった手料理や手編みのセーターなどが典型例でしょう。

5. 「ゆとり」や「むだ」が文化を創る

効率や合理性は、ある面で私たちの生活を便利で豊かなものにしてくれました。しかし、それによって希薄になった「ゆとり」や「むだ」にこそ、文化や人間生活にとって大切なものがあるのです。

効率や合理性一辺倒の生活や社会を再考する

近代社会が大切にしてきたもの。それは「合理性」や「効率」です。そのおかげで、確かに私たちの生活は便利で快適なものになりました。しかし、「合理性」や「効率」が切り捨ててきたものもあったのではないのでしょうか。

「ゆとり」や「むだ」の価値

物質面の「豊かさ」がある程度満たされてきた段階で、世の中は「ゆとり」の時代に入ったといわれています。「ゆとり」はある意味で「合理性」や「効率」では推し量れないものなのです。

自動車のハンドルにも「遊び」があります。この「遊び」は、少しの手の操作では車軸が動かないようにするために、大切な働きをしているものです。この遊びがなければ、ちょっとした操作でハンドルが動き、車が曲がってしまいます。人間が行う「遊び」にも同じ意味があるのではないのでしょうか。

「ゆとり」社会へ

高齢社会への突入によって、ますます「ゆとり」が必要になります。いわゆる「弱者」の人たちにやさしい社会、それは十分な「ゆとり」ある社会です。

空間もゆったりとしている、時間もゆったりと流れる、そうした時空間のゆとりがまちや社会には必要です。

まちづくりという観点では、自動車中心の社会を見直すことも重要です。自動車という機械に対応したまちづくりを見直し、歩行者などの人間に合わせたまちづくりを取り戻す必要があるのではないのでしょうか。

「ゆとり」や「むだ」が文化を生み出す

「ゆとり」「遊び」「むだ」、これらは文化にとって大切なキーワードです。こうしたものが文化を生み出すのです。

6. 文化とはつくりだすこと

文化は「つくる」と密接に関連があります。文化そのものが創り出すものである、また、つくる行為が文化を生み出すのです。

文化は創り出すものである

文化とは「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによって創り出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。」（『国語大辞典』（新装版）小学館）文化は、さまざまな意味で、創り出すものなのです。

創り出すことが文化だとすれば、それは受け身では生み出されません。一人ひとりの市民が文化と積極的に関わることによって、文化は創造されるのです。

創造と消費

文化は創造するものであり、消費するものではありません。消費は、「使ってなくすこと。使い果たすこと。」（『国語大辞典』（新装版）小学館）文化は創造し、伝えていくものです。

つくることを大切にする

文化を育むためには、つくること、特に人間の手でつくることを大切にするのが重要です。職人の技そのものが文化であるというのは、つくる行為が文化を形成する象徴のひとつです。私たちの生活も、消費でなく創造していくこと。これが文化づくりには大切なことです。

7. 生きざまの共有としての地域文化づくり

私たち一人ひとりの生活にあるこだわり。これがつくり出す「生きざま」を地域に暮らす人々が共感し、共有することによって地域文化が生まれます。

こだわり・意欲が地域文化を育む

何気なく生活している。そうした態度で文化は生み出せません。文化は一人ひとりの「こだわり」や「意欲」があってこそ生まれるものだと言えます。

生きざまを共有する

こだわりや意欲、これらがつくり出す一人ひとりの「生きざま」。それが感動を生み、共感が得られることによって、地域の人々が生きざまを共有することができます。そうしたものが地域文化なのではないでしょうか。

八尾らしさを創り出す

八尾の個性、八尾らしさ。これも、ある意味で、こだわりや意欲によって創り出されるものでしょう。八尾に暮らすこだわりを一人ひとりの市民が持つこと、それが積み重なると、必然的に八尾の個性が生まれます。

かつては、暮らしに地域の特徴がありました。しかし、生活に必要な物資は世界各国からやってくる、また、マスメディアなどによって世界中の情報が手に入る など、生活を支えるしくみが世界規模で広がっていくにつれ、こうした地域性も希薄なものになっています。どこに行っても同じ暮らしをする、そして、それが積み重なったまちや文化は、どんどん画一化していきます。

もう一度、八尾に暮らす意味を再考し、こだわりを持つこと、それが新しい「八尾らしさ」を創り出すためには不可欠です。

「これでいいわ」と流さない

いろいろなことを「これでいいわ」と流さず、じっくりと考え、こだわりを持ちましょう。

8. 生活の作法としての文化形成

文化は私たちの暮らしの総体です。日々の暮らしが積み重なって文化がかたちづくられます。生活とつながる文化のあり方を考えていきましょう。

生活と文化の関係

文化を考えるとき、日々の暮らしの一環として考えることが大切です。文化は生活のさまざまな側面がつくり出すものなのです。

文化のあり方を考える、それは生活のあり方を考えることにほかなりません。日々の生活はどうあるべきか、それを通じておのずと文化のあり方が見通せるはずです。

芸術文化・歴史文化・生活文化

文化というと「芸術文化」や「歴史文化」がすぐに頭に浮かびます。芸術は生活を豊かにするもの、歴史はいにしえからの生活の積層によってつくられたもの、そう考えれば、両者とも「生活文化」の一環として捉えることができます。

この文化振興ビジョンでいうところの「文化」とは、そうした「生活文化」の総体を取り扱うものです。

生活と文化の関係を再構築する

文化を生活と切り離さず、生活と結びつけること。そして、生活そのものに価値を見出し、文化と生活の関係を再構築していく方途を考えることが大切です。

9. 文化はすべてに関連する

私たちの日々の暮らしすべてが文化と関連しています。文化という切り口で暮らしのあり方やまちのあり方を考えることによって、文化の薫るまちづくりが見えてきます。

文化の目をもつモノづくり・まちづくり

文化は特別なものではありません。さまざまな日々の営み、それが文化をかたちづくっていくのです。私たちが行っている日々の営み一つひとつに「文化の心」を持ちましょう。

合理性や効率も確かに大切です。しかし、それだけでなく、モノづくりやまちづくり、それに関わる一つひとつの活動にも、常に「文化」の視点を持つことが大切です。

つながりや位置づけを意識する

文化はさまざまな行為や要素が集まり、積み重なってできあがります。そこで、それぞれの文化活動や生活の営みについて、お互いの関連性やつながりを意識しつつ地域文化として一体のものにしていく必要があります。

文化とまちづくりをつなげる

それは、まちづくりそのものです。文化とまちづくりを結びつけること、これが、この文化振興ビジョンに課せられた重要な課題のひとつなのです。

10. 文化の創造と継承

現在まで継承されてきた地域の文化を、いかにして次代へ渡していけるのか、また、私たちが新たな文化を生み出して次代へ送ることができるのかを考えることが大切です。

過去から現在、そして未来へ

私たちが暮らす八尾の文化は、過去から現在へ受け継がれてきたものです。生活の営みが積み重ねられ、地域の文化となって今日に残されています。これに、私たち現代に暮らすものが創り出す新たな文化を積み重ね、次代へと伝えていくことが大切です。

遠い将来を見据えて

日々の暮らしも大切です。しかし、文化を考えるときには、もっと大きな視野で考えたいものです。私たちの世代のことだけでなく、過去のこと、そして、将来に何を伝えるべきかを考えていくことが重要だと思います。

活動の積み重ねが文化を創る

わたしたちの日々の行い、その一つひとつがまちをつくり、文化をつくり出します。そうした広い視野で、生活を捉えてみましょう。そして、一人ひとりの自覚と責任のもとで行われた活動の積み重ねが、生き活きた素晴らしい八尾の文化を生み出すのです。

11. 多様な価値を見い出す

ものごとにはいろいろな意味、価値があります。ひとつの見方ではなく、いろいろな見方をする／できることが「文化」を生み出すきっかけになるはずです。

いろいろな意味や価値を見い出す

もともとものごとにはいろいろな意味や価値がありました。しかし、いつのころからか、効率や合理性一辺倒の社会・生活になってしまったのではないのでしょうか。

一面からものを見ず、いろいろな意味や価値を考えてみましょう。そして、そのとき、いろいろな価値を持つものが「文化」を生み出すものではないのでしょうか。

枠組みをはずした見方

人はだれでも自分自身のものの見方を持っているものです。しかし、普段見ている視点とは違ったところから眺めると、新たな発見をすることも少なくありません。文化を考えるときには、自分の枠組みをはずした見方も重要です。

多様性を認め合い、共生する

八尾のように多くの人々が暮らす都市では、当然、人々の価値観は多様です。多様なものの見方をするということは、こうしたいろいろな価値観やものの見方を、お互いが認め合い、共生することにつながります。

価値を議論し、共有する

さまざまな立場の人々が集い、文化に関わるいろいろなことらについて、議論を重ねることによって、お互いの立場や考え方を理解する。そして、意味や価値を共有することが地域文化の創造には必要です。

議論し価値を共有していくためには、(1)意味のないものと思われるものをも許せる度量、(2)相互に認め合い、共生し、排他的にならない、(3)みんなで協働してやることを大切にする、(4)個人の持っているノウハウを出し合う、ということが大切です。

文化の根底には、一人ひとりのこだわり、生きざまがあります。それが共感を呼び、多くの人々が共有することができれば、地域文化と呼ぶにふさわしいものになるはずです。

12. 協働の文化振興をめざす

地域文化の担い手である市民が主体的に行動し、それを行政が支援していく。そうした役割分担と連携によって、協働の文化振興をめざします。

責任と役割の分担－協働

協働とは、立場の違った者が共通の目的を持ってそれぞれの役割にもとづいて活動をし、協力していくことを言います。共同や協同が、立場が似通った者が共通の利益を追求する際に使われるのとは少し意味が違います。

市民と行政が協働を進めるにあたっては、相互に責任と役割を分担することが必要です。

市民が主体

地域文化の主な担い手は、その地域＝まちで生活している住民－＜市民＞であることは言うまでもありません。地域文化は享受者自身がすなわちつくり手でもあるのが、その特徴なのです。

行政の支援

行政は、こうした市民の主体的活動を支援する支援役になるべきです。その信頼度と期待度、また、財政力や事業遂行力を活用して、地域の文化・芸術の振興を市民とともに推進していくことが求められます。

また、行政に対する市民の信頼や期待を活用し、市民活動の媒介役になることもできると思います。行政が複数の市民活動を結びつけ、個人やひとつの団体ではできないことを進めることで、市民と行政の協働による文化の創造やまちづくりがさらに発展するはずです。

人・もの・しくみ・しかけが連動する

文化振興ビジョンの実現のためには「人・もの・しくみ・しかけ」について、主体的努力が計画的・実践的になされることが必要です。

13. 個から公共へつなげていく

市民生活にとってもっとも大切なものは、個人の生活です。しかしそれはまた、他の人々の営みを尊重することでもあります。それらの意味や価値について議論することによって共有することが必要です。

個人から公共へ

市民個人の思いつきからはじまって、日常の生活のなかの文化要素を文化・芸術の創造につないだり、身近なきっかけから気軽に参加できる土壌づくりも、それらをみんなが共有することができなければ、市民と行政が協働して実行していくことの実現が妨げられますし、困難を伴います。

文化活動の公共化

こうした個から公共へという関連は、広い意味で、市民の文化活動にも求められる側面です。

公共性は議論から生まれる

公共性とは何か、これはなかなかむずかしい問題です。天与の公共性はあるのでしょうか。これほど価値や考え方、生活様式が多様化している現代では、議論のなかから公共性を見出し、共有していくことが必要だと思います。

公共性について、あるいは、個々の文化活動が公共性を持つものかどうかなど、これからも議論をつづけましょう。そして、そのなかから見出した共有できるものこそ、公共的なも

のではないのでしょうか。

14. だれでもが気軽に参加でき主体的に活動できる雰囲気づくり

文化を通じての「生活環境の快適さの創造」には、より多くの人々がその活動に参加することが重要な条件です。そのためにはお互いに身近なきっかけをつくって、気軽に参加できる土壌づくりが必要です。

自由に選択できる多様性の確保

文化活動にだれでもが気軽に参加できるためには、文化に関わる底辺を広げ、広い土壌づくりが必要でしょう。すなわち自由に選択できる多様性の確保です。

自主的な活動をつないでいく

そして、相互のつながりや位置づけを明確にしつつ、幅広く携われる人や知識を持っている人の有効な起用を求め、コミュニケーションを密にして、それぞれがそれぞれのなりわい（仕事・職業）と文化活動の融合を図り、文化的ニーズを共通なものとして、自主的に活動していくことが肝要です。

生活と文化を近づけ、結びつける

日常の生活から文化要素（身近な景観・自然も含む）を発掘し、市民の生活環境の快適さの創造要素につなげていくことが、新たな文化・芸術の創造にとっても必要です。

多くの市民が、文化・芸術を身近なものとして接し、気軽に参加できる土壌づくりを行っていくことが重要です。

市民生活と文化環境・芸術作品をよりつなげていくことが、地域の文化活動にとってはなにものにも代えがたく大事です。

文化活動をまちづくりへ活かす

そしてそれらの市民による文化の活動が、広く〈まちづくり〉に活かされることが大切です。

15. 『おもしろがる』を広げていく

何かをはじめるときは、『きっかけ』があるはずです。どんなことに対しても、興味を持つことから、スタートします。

「おもしろそう」からはじまる

わたしたちが、なにかをはじめるとき、つまらないことをはじめてみようと思いますか。感動する素材（人、もの）に触れて、『おもしろそうだ』と思うことからはじまるのではないのでしょうか。

「おもしろそう」を伝える

はじめは、観ているだけでいた人も、観ることで「素晴らしい」とか、「おもしろそうだ」ということから、まわりの人にその気持ちを伝えたいと思うようになります。こういう伝えるということが、文化の活動を広げていくことになるます。

たとえば、お母さんが、子どもたちの喜ぶ顔を見たいからと、はじめは、観ているだけでいた人形劇を、自分たちで、やってみようとして学習することからスタートし、やがては演じる側になっていくのも、そういうことではないのでしょうか。

自分の「おもしろそう」を見つける

身近な『きっかけ』から、参加し、自主的に活動していく気持ちが大切です。

私たちは、色々なものが溢れていて、その一つひとつに感動することが、少なくなっています。本当に『おもしろい』と思ったことは、何かをはじめる『きっかけ』になり、まわりの人を巻き込んでいくことにならないでしょうか。

どう『おもしろい人』『おもしろいもの』を見つけていくか、感じていくか、また、伝えていくかが、文化に興味を持ち、盛んにしていくのではないのでしょうか。

「おもしろい」を広げていく

ただ、過ごしていただくだけでなく、『おもしろい』と感じる心を持ちましょう。『おもしろい』と感じることが、『きっかけ』になっていくのではないのでしょうか。

16. 点から線へ、線から面へネットワークの必要性

市内各地に点在するさまざまな文化資源を結び、広がりを持たせていきましょう。

個人から地域コミュニティへ

個人と個人のつながり。それが広がって地域のコミュニティになります。昔の長屋における「向こう三軒両隣」的つき合いから小さいコミュニティが生まれます。現在のまちでは、集会所やコミュニティセンターなどがその役割を果たしています。

公共施設から広がる地域コミュニケーション

自治会、子供会をはじめとして、地域には多くのコミュニティ組織があります。こうした場におけるコミュニティづくりから文化を大切にすることを育む糸口が生まれるのではないのでしょうか。

点在する文化資源をつないでいく

同様に、いま点在しているさまざまな文化資源をつないでいくことも必要です。歴史資源を結ぶ歴史のネットワーク、文化施設を結ぶ文化のネットワーク、など、点から線へ、線から面へ、とつなぐことで、資源からまちづくりへと展開していきます。

人的ネットワークの構築

人的資源も同じ。分散した人的資源を結びつけることで、文化に関する力は倍増します。

17. お互いの個性を壊さないネットワークづくり

個人も組織も個性を持っています。お互いにその個性を認め合いながら、足りないところを補ったり良いところを活用していくことで個性あふれる文化やまちづくりを育てる土壤になるはずです。

立場が違えば見方も違う

新しく住むようになった人からは、祭りなど地域の行事に参加できないと聞きますが、それは積極的に参加したい人でしょう。昔から住んでいる人からは、地域のことに手を染めてくれないと聞きますが、どちらかというとなじみのない人を見るとそうなるでしょう。

活動をしている団体や組織にもあてはまるでしょう。新しくできた団体の人からは組織が堅くてうまくつき合えない。活動歴の長い会の人には教えてあげたいことはたくさんあるのに聞きに来てくれない。全く上に書いたことと同じことなのです。

異なった立場を認め合う

お互いの立場の違いや思いの違いを認め合ひましょう。昔から住んでいる人・新しく住むよ

うになった人、さらに違う文化や歴史を持った外国人も多く住むようになってきています。自分の主張だけでは話もできません。相手を認め合うことを出発点にしましょう。

活動をオープンに

仲間意識や団結は活動していく過程で育まれていきます。しかし、同時に、排他的になったり頑固さにつながる危険性を持っています。結果として孤立することになることさえあります。グループの活動をオープンにしましょう。

議論では勝った負けたをつい言ってしまいがちですが、議論は相手がいないと自分の正しさも間違いも確認できないのですから、つくりあげる過程として議論は不可欠です。相手の言うことを確かめ合うことが大切です。

個性を尊重した軽やかなネットワークづくり

お互いの個性を壊さない軽いネットワークは、利害や体制に影響の少ない、情報の交換や共有化から始めると、疑心暗鬼や勝手な思いこみがなくなり、お互いの活動や行動を理解できるようになるはずです。

18. 個人を大切にした共生の文化

多様な人々が集まって暮らす現代都市。そこでは個人個人がお互いの個性を尊重し、支え合っていく共生の精神が重要になります。

違いを認め、個性を尊重する

基本的に個人一人ひとりには個性を持った異なった存在です。多様な価値観を持った人々が集まった現代の都市社会では、こうした点を意識しないわけにはいきません。

個性ある個人が集まって暮らす。そこでは、個人の差異を大切にする、つまり個性の尊重が、文化づくり、まちづくりに必要です。

支え合う社会

ひとりでできないことは力を合わせる。また、異なった特性を持った人々がお互いに支え合う。集まって暮らすことのメリットを活かすことが重要です。

「支え合う」というのは、双方向の関係です。「支える」「支えられる」立場は、逆になることもあるのです。お互いがお互いの弱点を補い合う、そうすることでよりよいものをめざす、そうした関係性が支え合うことの根底にあります。「お互いさま」なのです。

お互いを理解し、認め合う

多様な人々が集まれば、いろいろな衝突や軋轢も起こるかもしれません。しかし、それを安易に回避せず、お互いを理解することができれば、真の共生が可能になります。

たまにはケンカもあるでしょう。しかし、「ケンカするほど仲がいい」とも言います。お互いが理解し合い、信頼関係で結ばれていれば、一時のケンカもたいしたことはありません。個人の楽しみに基調を置くことが多い文化では、特に、こうしたお互いを認め合うことが必要だと言えます。

対等で平等な関係

個人や文化に上下はありません。対等で平等な関係が大切です。

19. さまざまな立場の人が集い協働する

似通った者どうしが集まるだけでなく、さまざまな立場の人が集い、語り合う場所が必要で

す。そこでは、いろいろな意見が交換され、さらなる文化振興につながります。

文化の感じ方・捉え方は多様である

価値観は、人それぞれに、感じ方が違うものです。それと、同じように文化に対しても、ある人は、心の『やすらぎ』『うるおい』と感じ、またある人は、『刺激』『生きる活力を与えるもの』と感じています。

個人の価値観による楽しみ—それぞれに、きっかけが違っていても同じものに感動する人は、たくさんいることでしょう。

また、同じものに触れていても違った感動を覚える場合もあります。

さまざまな人々が集う

昔から住んでいる人も新しく住むようになった人も、ベテランも初心者も交えて活動しましょう。地域に密着しすぎて見えなくなっている大切なことを外の人から教えてもらうこともあります。ベテランはいろいろ知りすぎて困難なことから抜け出せないことが、ビギナーズ・ラックで初心者がうまく切り抜けることもあるはずです。対等の関係でつくっていくことが新しい文化やコミュニティを生み出すはずです。

外からの目と内からの目を重ねる

身近すぎてあたりまえになっていた八尾の素晴らしさなど、外から来た人が、教えてくれたりします。さまざまな価値観を持った人が、集える場所をつくっていくことにより、地域の文化や環境を再発見し、新たな地域文化の創造につながるはずです。

評論活動の場を提供し、保証する

また、さまざまな議論の必要性という観点では、評論活動とその活動の場を保証することも重視しなければならない課題です。

20. 文化のボランティア

盛んになりつつあるボランティア活動。文化の面でもボランティア活動を有効に位置づけ、文化のまちづくりへと発展させていきます。

ボランティアとしての文化活動

阪神・淡路大震災を契機として日本にもボランティアが根づこうとしています。こうしたボランティア活動の継続のなかで、市民によるまちづくりや文化活動への意識が高揚され、具体的にさまざまな分野のグループが誕生することが期待されます。

こうした新しい文化団体・グループの形成の輪が広がれば相互に刺激し、影響し合い、より生き活きた文化活動に発展していきます。

ゆるやかな組織化

ボランティア活動は、あくまでも任意と善意と自主にもとづく活動です。したがって、その組織化についても、「お仕着せ」になるとときにはその活動は組織になじまなくなることに留意する必要があります。

誕生した文化グループに細かい制約を課せず、自由な活動に委ね、より広い市民活動に発展させることが、「まちづくり」に寄与することにつながるのではないのでしょうか。

イベントを文化創造、まちづくりに活かす

ボランティア活動を盛り上げ、具体的な形としてイベントが催されることによって、より市

民活動が活性化されます。イベントの目的はあくまでも市民文化発展のためであり、イベント一つひとつの積み重ねが市民文化を深耕し、発展させていきます。

イベントからまちづくりへ

次段階では、市民文化の発展の活力がどのように「まちづくり」に活かされるか、つまり「まちづくり」との関係で考えることが大切です。イベントの目的は、市民の生活環境の快適さの実現にあると言えます。祭り、盆踊りなどのイベントにおける市民の交流など、「まちづくり」のためにいろいろな角度からイベントの内容が企画され、市民がこぞって参加するという意義と訴求が必要です。

21. つくっていく過程を大切に作る

できあがったことだけが文化ではなく、出会った人とのコミュニケーション、価値観の違いを認め合い議論すること、苦しさや楽しさを共有することなど、つくっていく間で起こるさまざまなことが文化を生み出すはずです。

つくることが見えなくなった

できあがったものにどうしても目がいってしまい、それだけで評価をしてしまいがちです。便利になってしまいつくることをしなくなって途中の苦勞などに気づかなくなっているのかもしれない。

まちはノウハウや人材を持っていると思われる大手の企業や組織で行っていることが多くなり、つくっている人の顔が見えなくなっています。その結果、まちの個性は無くなりコミュニティも希薄になり、人材も育ちにくくなっているようです。

つくることに参加する

身近なきっかけを利用して勇気を出してつくる過程に参加してみましょう。そのなかできっとおもしろい人、意外な知識や技術を持った人などとの出会いがあるはずです。最初から地域やコミュニティに愛着を持つ必要はないでしょう。つくりあげるための議論や苦しさの共有などから生まれてくるでしょう。

つくることを共有する

みんなでつくることは情報の交換の場だということです。個人の生活は大事ですが、ひとりでやっていると寂しくなることもあるでしょう。みんなでつくることは楽しいですが、煩わしいことも出てくると思います。そのバランスをどのようにとっていくかが大切ですが、そのようなことも経験した人もいるはずですから、自然と解決する方法や情報が入ってくるはずです。

つくっていく過程で議論や活動を通して立場の違いや価値観の違いを認め合うことになり、市民も行政も自己改革や個が確立され、新しい文化を創造し育むことになるでしょう。

22. 双方向の情報がコミュニケーションを生む

さまざまな文化に関わる情報を、広く、わかりやすく、伝えていくことが必要です。情報を発信したいものと情報を受信したいものを結びつける、双方向の情報システムを構築していきます。

文化に関する情報が伝わっているだろうか

市内でも、さまざまな文化活動が催されています。こうした情報が広く市民全体に伝わって

いるでしょうか。知りたい情報を知りたい時に、手軽に利用できる情報システムの構築が必要です。

CATV やコミュニティ FM、インターネット、情報誌、情報コーナー、コミュニティボードなど、文化情報を発信する手段と環境、条件整備を急がなければなりません。

わかりやすい情報提供

情報はわかりやすいものでなければ利用されません。わかりやすさの第一は、情報そのものが、わかりやすい表現、内容であること。そして、わかりやすく整理され体系化されていることが大切です。

双方向の情報交流

情報は発信者と受信者がいて成り立つものです。発信者が伝えたい内容と受信者が受け取りたい内容が整合あるものになっているか、それが大切なのです。

一方通行になっている施策や催しもあらためて別の角度から考えてみることにより、双方向になることがあるはずです。

発信側、受信側、それぞれをつなぐ媒体（CATV やコミュニティ FM、インターネット、情報誌、情報コーナー、コミュニティボードなど）は双方向性を指向することが大事です。発信側の発言内容について、受信側がその内容を理解し、反応を示すことが必要です。

受信者が時により発信者になるのは、よりよい情報交流の「出会う」場づくりを提供することにもなります。情報が双方向になる時、そこに、コミュニケーションが生まれ、情報それ自身の価値が付加されるのではないのでしょうか。

楽しい冊子をつくろう

八尾市発行のパンフレット類にもたくさんの文化情報が掲載されています。しかし、PR の不足なのか市民に定着していないものも少なくありません。

幅広い市民の利用が可能になるよう、市民との共同製作などによって、楽しい冊子づくりを行ってみましょう。

23. 新しい専門家を育てる

芸術だけに限らず広げていった文化活動全般を大きく見ていける人が、必要になってきます。市民、行政の区別なく考えていくことができる人です。

さまざまな立場の人をつなげていく

芸術家などという専門家と『楽しみ』を感じることから活動をはじめた市民。同じ感動を求めているのですから、専門家と市民をつなぐ必要性はないのでしょうか。

せつかく、個人のレベルで参加する人、個性の豊かな人が増えても、バラバラにしておくだけでよいのでしょうか。

コミュニケーションやネットワークを活性化する

文化活動を、ただ単に広げていくだけでよいのでしょうか。発掘された素材・文化的な資源・人を点で置いておくのではなく、線としてつなげていくと、もっと、生き活きとしたまちづくりになります。

また、専門家とアマチュアのコミュニケーションを活発にすることで、文化の層が厚くなり、より、高いものになります。

媒介役や先導役が必要だ

こうした状況に対処し、さらなる文化振興を支えるためには、新しいタイプの専門家を必要とします。それは総合的調整を果たすコーディネーターと先導的役割を果たすオピニオンリーダーです。

専門家とアマチュア、アマチュアどうし、市民と行政といろいろな形でパイプ役になる人、コーディネーターを育てていくことが必要ではないでしょうか。コーディネーターには、文化・芸術について幅広く携わることのできる人がふさわしいと思います。

また、新たな文化・芸術活動にあたって周囲に影響力を持ち、指導的役割を果たせるオピニオンリーダーも必要です。

時間をかけて視野広く考えることができる人材を

大きく、文化を育てていくことは、長い時間が必要になってきます。長い流れのなかで幅広く柔軟に携わることのできる人が必要ではないでしょうか。

24. 素材の発掘も合わせ方向性を出す

八尾のなかで、大切にしなければならぬものがありました。時間が過ぎ、生活が変化するにしたがって、価値観が変わり、無くなりかけているもの、知らないものがあります。もう一度、八尾に何があるのかを知ることが、文化を知ることになるのです。

資源・素材に目を向ける

「今、何に目を向けるか？」ということは、どんなものがあるのかを、しっかりと把握していないとできないことではないでしょうか。

無くなってしまったもの、無くなりかけているものも含めて、これからどう活用していくのかが、芸術・文化を考えるきっかけになるのではないのでしょうか。

素材を活用する

素材と一口に言っても、さまざまなことが考えられます。それは、人やものであったり、昔のこと、また現在のことであったりします。そして、価値のあるもの、今は、余り価値がないけれど残しておきたいもの、私たちにとって何が大切かを考えてみましょう。

大切なものは、置いておくだけでは、価値がありません。うまく活用する方法を考えてこそ、魅力あるものに、なるのではないのでしょうか。

たとえば、河内木綿や河内音頭、また、道鏡や今東光なども素材の一つです。もう一度、いろいろな方向から資源を洗い直してみる必要があるのではないのでしょうか。

価値を発見し、共有する

私たちは、普段の生活のなかから素材を発見し価値を見出すことで、新しい価値観を得ることができます。それをどう人に知らせて、共感を得られるかを考えることで広がりができるのではないのでしょうか。

活用方策を考えていくことが文化を育てる

創造、再創造も含め、資源の魅力、重要性をよく考えましょう。その上で、どう活用するかの方角性やどう未来につなげていくかの方法を考えることが、『文化』を育てていくことになります。

25. 地域文化を大切にしよう

本来、価値があるのに埋もれているものがあります。古い、新しいに関係なく、身近すぎて、価値を見い出せないでいることがあります。

地域に根ざした文化

生活形態によって価値観が変化し、時代、世代によっても価値観は、変わっていきます。無くなってはじめて大切さを感じることもあるのです。

地域に根ざした文化を念頭に置き、時代の流れに柔軟に対処しながら、考える必要があります。

プライベートな活動をどう広げていくのか、認めていくのかも重要になります。

八尾の地域文化を見つめ直す

八尾のなかで既に無くなろうとしている文化の素材がいくつかあります。残していく方法さえわからずにいる。また、知られていないだけで、本当はとても価値のあるものもある。そして、もう無くなってしまったけれど、本当は、価値があるのではないかと考えられるものを、もう一度、見つめなおすことが重要です。

地域文化の意味を考えていく

地域資源も、時代の変化によって、その価値観を変えていくことがあります。その都度、考え直しながら進めていくことが、地域・人に根づいた文化をつくっていくことになるのではないのでしょうか。

26. 地域性を活かした話題性を与える企画

私たちの住む八尾市には、プリズムホールという地域ホールがあります。文化に接する身近な施設として、鑑賞するという市民の文化活動の『きっかけ』をつくる入口にしてはどうでしょうか。

オリジナリティのある企画が欲しい

私たちの住む八尾市には、プリズムホール・生涯学習センター・コミュニティーセンターと、大きく3種類の施設があります。地域ホールとしての役割を果たしてくれるのは、プリズムホールですが、他市のホールと同じような企画で運営していてよいのでしょうか。もっと、オリジナリティのある企画はできないのでしょうか。

八尾の芸術・文化を知るきっかけづくり

一般的な企画ばかりではなく、八尾の芸術・文化を知るきっかけになるような企画を考えてみては、どうでしょうか。

有名な音楽家の演奏を聴くのも、知名度の高い劇団の演劇を観ることも、感性を豊かにする上では、重要なことです。でも、それだけでよいのでしょうか。もっと、生活に根づいた芸術を知る必要があります。

企画を考える人材も、専門家だけでなく、ふつうの市民感覚で文化を捉えることができる人、また、鑑賞者の立場で発言できる人など、多様な人々が必要でしょう。

地域性を活かして話題性を与える企画を考えることで、八尾の芸術・文化を知るきっかけになり、活性化していくことになります。また、地域性を活かした企画によって、八尾としての特徴ある文化情報を発信することができます。

地域性を活かし、芸術・文化に触れるきっかけをつくる

地域性を活かすということで、もっと、芸術・文化を身近なものとして触れることができます。まず、触れてみて、感動することが『きっかけ』になるのではないのでしょうか。

27. 「芸術は個人の楽しみ」をパブリックなものに

日常の生活のなかで余暇を利用した、個人の欲求を満たすための楽しみも、ある意味では文化活動のはじまりになります。同じ『楽しみ』を持った人とのつながりは、裾野を広げていくことになります。

狭い範囲でいいのだろうか

高度に洗練された芸術・文化だけのことを考えていてよいのでしょうか。高度なものは文化に触れるきっかけづくりとしては取りつきにくいらいがあります。また、『個人の楽しみ』というだけのアマチュア芸術は、一人ひとりの文化化には貢献しますが、それに限定されてしまうことになります。

参加意欲の高まり

ライフスタイルの変化に伴って、余暇を楽しむために、みずから音楽を楽しんだり、絵を描いたりといったアマチュア芸術家が、多くなってきています。鑑賞すること、受け身であることから、芸術活動に参加するという意欲が生まれ、楽しめるようになってきています。

同志をみつける

同じ『楽しみ』を持つ人がいる。その人たち、一人ひとりを認め合いながら関わっていくことや、つながりを持つことが、芸術・文化活動の裾野を広げ、互いに刺激し合いながらレベルアップを図ることにつながります。

楽しみをつなげる

一人ひとりの『楽しみ』をどうつないでいけば、よいのでしょうか。『個人の楽しみ』にとどまらず巧くつなげていくことによって、より高度なものに成長していきます。無理矢理、つなげるのではなく自然な形でつながっていけば、より深いものになります。

人と人が出会って、情報を交換しながら、感動を分かち合うことも、文化活動の『きっかけ』になるのではないのでしょうか。

個人の楽しみをパブリックなものへ

はじめは、『個人の楽しみ』からはじまった芸術活動であっても、つながりを持たすことによって、パブリックなものへと変化していきます。

28. 柔らかな心を持った子どもを育てる

子どもの頃の感動は、純粋で新鮮な驚きです。多様な文化に接することで、感動を受け豊かな体験を積み重ねることで、文化に対する理解を深めるきっかけになります。

感動が少なくなった子どもたち

最近の子どもたちは、生活のスタイルが変わってきたからでしょうか、楽しいことを楽しいと、嬉しいことを嬉しいと思えない無感動な子どもが多くなってきているようです。

学校教育はもちろん、家庭学習に関しても、学力アップを図るだけでよいのでしょうか。心の成長は、忘れていてよいのでしょうか。

感動が文化を受容する力を養う

子どものころに覚えた感動は、成長し大人になっても、忘れていないものです。心が柔らかで、感受性の強い時期に色々なものを観たり、聴いたりし、感動する機会に多く触れることが大切です。

そして、文化的な体験を積み重ねることによって、自然に、文化という柔らかな素材を受けとめていくことができます。

感動ある経験ができる機会を増やす

柔らかな心を育てるために、身近に感動を与えられるように、考えなくてはなりません。気軽に多様な文化に触れられるスペースや、自然に受け入れられる教育システムなどです。

与えるだけでなく、鑑賞力を育み、鍛えるという経験を積むのも大切です。

文化を受け入れられる柔らかな心

子どもたちにこれからの文化を託すには、無表情、無感動な子どもではなく、多様な文化を受け入れられる柔らかな心と、主体性を持った子どもを育てていくことが重要です。

29. 地域文化を育むためのホールと文化振興事業団

地域ホールや文化振興事業団は、専門家と市民、地域と外部、プロとアマなど、地域文化に関わるさまざまな人やものをつなぎ、地域文化の核として運営されるべきです。

地域文化の核としてのホール運営

地域ホールは、その地域の言わばハードとソフトの接点となることやコミュニティや専門家と市民をつなぐ「コーディネーター」の立場や文化センターの役割を持っているわけですから、それらの役割を果たせるよう「文化振興事業団」も運営され、地域性を活かし、話題性を与え、豊かで楽しい文化・芸術に接することができる企画を立て実行していくことがより求められます。

地域と外部、プロとアマをつなぐ

文化・芸術には、「外」から来るものが素晴らしいという考え方が根強くあります。しかし一方、住み・暮らす身近にある文化・芸術も素晴らしいということを実際に示し、プロとアマチュアの関係についてもそのつながりや位置づけを明確にし、鑑賞力を鍛え、観る側と創る側の相互の成長を図ることも大きな課題であり、地域のホールや文化振興事業団の重要な仕事のひとつです。

企画できるコーディネーターを配置する

美術館や博物館には、学芸員がいて、いろいろな企画をコーディネートしているように、プリズムホールにも新しい専門家が必要になります。専門家を置くことにより、従来の企画と話題性のある企画をバランスよく運営していくことが可能になってくるのです。

また、コーディネーターがプロとアマチュアをつなぎ、そのつながりを活かした新しい企画を考えることで、芸術・文化の広がりをつくることができます。

文化の総合的研究機関

さまざまな地域資源を活かしたまちづくりを進めるにあたって、その重要性や魅力をコーディネートし、ネットワーク化することが必要です。そこから八尾の文化のオリジナリティも生まれてきます。そしてそれらの文化・芸能・芸術の総合的研究機関が必要になってきます。

30. 近くで遊ぼう

自分が暮らしているまち。知っているようで案外知らないものです。遠くへ出かけることもいいですが、自分のまちを巡り、まちで遊んでみましょう。いろいろな発見があると思います。

近くを見直そう

「八尾には何もない」とよく耳にしますが、何かあればいいのでしょうか。あればそれしか見たり楽しんだりしないと思います。何もないから自由な発想でまちを見ることができるのではないのでしょうか。

少し努力が必要かもしれませんが、つまらないと思っていたことが遊んでみると楽しかったりするのです。身近でいつでも行ける場所にちょっと気持ちを変えれば感動することを見つげられるはずです。

「何もないから」「八尾なんて」というフィルターを外して身近で遊んでみましょう。歴史のある八尾市ですからきっと何か見つけることができるはずです。

史跡めぐりで歴史を再発見する

八尾市では自治推進課が中心となって毎年「史跡めぐり」を催しています。こうした催しをもっと増やすとともに、それに参加し地域を再発見してみましょう。

有志が集まって、こうした地域巡りのイベントを企画し、実行することも大切です。八尾にあるさまざまな歴史資源を「物語」として結び、巡りのルートを考えてみましょう。

市民参加で史跡めぐりの計画を

史跡めぐりには、毎回参加している市民も多くいると思います。何回も参加している市民を交えてコースの選定など計画に入ってもらい、市民と行政で作る「史跡めぐり」を行えば、参加していることから一歩進み参画してもらうことができ、コーディネーターとして活動してもらえるはずです。

31. 地域の歴史文化を学習する

知っているようで知らないのが自分の身近なところの史跡や歴史でしょう。もう一度、あたりを見回して探検してみましょう。素晴らしいと思うことが沢山あるはずです。子どもも大人も身の回りの歴史に興味を持ち学んでみましょう。

地域の歴史を知る

まず地域の史跡の場所や歴史を知ることです。見つけ出すことを楽しみましょう。職場や学校に行くための駅までの道に何かないか、あるいは買い物帰りなど自転車でいつもと違う道を走ってみるとか、散歩するときのアクセントとして一つの楽しみとして探してみましょう。八尾は古いまちですからきっと何か見つかるはずです。

子どもたちに地域を知ってもらおう

子どもたちに校区の歴史や環境を実際にその場所に行き興味を持たせるような体験学習が必要です。その後で図書館や歴史民俗資料館などで調べると教材や文献資料が生きてくるはずです。

幼稚園や保育園では園外保育として実際に見るだけでも記憶として残るはずです。

「百聞は一見に如かず」を校区で体験することにより、地域に愛着を持つきっかけになるは

ずです。

いろいろなことを気軽に調べられる場所をつくる

調べようと思ったときに調べたり情報が得られる場所を作りましょう。

現在、本町・山本・志紀の三カ所の図書館、生涯学習センターのカウンター横の書架、市役所三階の情報公開コーナーなど、本や文書を見ることができる場所がありますが、まだまだ充実する必要があります。また市民のコレクターなどの情報もありません。

民間でも行政でも調べることでできる場所や情報の得られる場所があれば地域の歴史はもっと身近なものにすることができるはずです。

32. 過去から未来へ柔らかに文化を継承する

八尾には古くから伝え残されてきたものが多くあります。それらを枠にはめた形で残すのではなく、生活の一部として捉えられるような伝え方をすれば、生きた文化として未来につながることはできるはずで

時代とともに変化する河内音頭

河内音頭はまさにその典型でしょう。太鼓だけの時代から三味線が入り、そしてエレキギターやシンセサイザーなど現代の楽器も採り入れ、夏の風物詩として時代とともに形を変えながら今に伝わっています。

もし河内音頭を枠にはめ決まった形として残していったとしたら、無形文化財になったかもしれないませんが、今のように老若男女が輪になり踊るような盛り上がりはなかったでしょう。

何を残すか、何を变えるか

「残っているものは残さないといけないもの」という「べき論」で考えるのではなく、八尾にとって地域にとって市民にとって、もっと個人的に自分にとってどのようにパブリックに関われるのかを考えて「残すもの」「残さないもの」「改めるもの」などを市民どうし、市民と行政とが議論しながら一緒に考えていくことにより文化と生活とが分かれな

古いものもはじめは新しかった

古いものも最初は新しいものだったのです。ですから古いものだけに目を向けるのではなく日常生活のなかにも価値を持ったものがあります。

日常の風景やまちなみに目を向けよう

残すもの、改めるものを判断する目を養いましょう。博物館のガラスケースに入ったものはわかりやすいですが、日常普通に目にしているもののなかにも価値のあるものがあります。自然や景観、まちなみなどは少し関心を持つことによって興味が深まります。

33. さまざまな立場の人が歴史的価値について議論する

現代に暮らす私たちは、なぜ歴史的な価値を大切にしなければならないのでしょうか。また、後世に何を伝承していけばいいのでしょうか。さまざまな立場の人が集い、議論をすることによって、これらが見えてきます。

新旧の住民交流

祭りなど地域の催しに参加する人が少なくなっている地区もあるようです。長く住んでいる人も新しく住むようになった人も交流の場をつくり、地域の行事や催しを共有の財産と

考え、参加することからはじめましょう。

せっかく同じ場所に住んでいるのですから、新しく住むようになった人は、いろいろな人と触れ合うことにより、地域の伝統や歴史を教わることもあるでしょうし、生活も楽しくなるはずです。

違う価値観の人が入ることによって、今まであたりまえすぎて見えなかったことや、すごく大切なことがわかるかもしれません。

出会いや発見について語り合う

市民も行政も楽しみながら八尾のまちを探索してみましょ。きっと気がつかなくなったり見落としていたものに出会うはず。そして出会ったものについて話し合う場をつくりましょ。見ただけで終わらせないことが生活に文化を取り入れることにつながるはず。

歴史的な価値について議論する

文化や文化財を博物館などに入れて形を決めて保存するだけでなく、新しいものにも価値を認めて、市民と行政とが価値観の違いや立場の違いなど多様性を認め合いながら議論していくことによって、文化は生活と密着して継承されるはず。

34. 地域の公共資源を大切にす

地域の公共資源は市民みんなのも。一人ひとりが大切に扱うとともに、みんなで力を合わせて管理していきましょ。

文化財や自然を大切にす心を持とう

文化財・史跡を市民全体の財産として共有している意識を持ちましょ。八尾には古墳が多くあります。古くは江戸時代に刊行された「河内名所図会」に盗掘の絵が載っています。今も汚されたりしている古墳があります。社寺の壁にも落書きがあります。

高安山をはじめとする自然の資源も自分の庭だと思えば、大切にすてゴミなど捨てないでしよ。気持ちの持ちようでも心の財産は税金もかからず増えていきます。大切にす心も自然と生まれてきます。ちょっと見方を変えて文化財や自然を楽しめるはず。

市民みずからの手で文化財や自然を守っていく

文化財は行政が保護し残していくものと考えられがちですが、市民が本当に残す必要があると判断したら、トラスト運動なども視野に入れながら「私には関係ないわ」と思わずに行動することが大切。

山の保全や公園の清掃なども市民みずからの手でできます。市民と行政の協働で、公共の場を管理・保全していきましょ。

公共施設を大切にす

図書館でも本が無くなったりしていると聞きます。公共施設の使い方のマナーも考えてみましょ。「公共の財産」ということを考え責任を持ちましょ。

公共施設の活用についても、使用のルールづくりから市民も行政も一緒になって考えましょ。文化活動の場所の確保がなかなかできない現状もありますが、空き教室の開放など新たな利用形態も利用と管理を一体に考えながら検討しましょ。

市民が責任を持って管理することができれば、公共施設ももっと自由に利用できるようになるはず。開館の時間制限がなくなる、利用形態の自由度が増える。そのためには、一人ひとりの利用マナーの向上や市民による責任ある管理形態についても検討していきましょ。

35. 文化の心を持ったモノづくり

分業が進みモノをつくるのが本来の生活を豊かにすることから離れて、生産のための生産になってしまいました。人を中心にしたモノづくりに戻すことにより生活につながった生産となり、生産が文化を生み出すことにつながるはずです。

社会が見えにくくなった

産業革命により分業体制が高度になり、モノを作ることが文化と離れてしまいました。日本ではさらに高度経済成長やバブルにより拍車がかかり、生産のための生産、つくっている人も最後の製品はどんなモノかわからずにつくりつづけてきました。

モノをつくるだけでなく、企業のシステムはもちろん行政までも分業で全体が見えなくなってしまっています。さらに社会のシステムまで分業になり、人が生きていく目的も見えなくして、家はただ帰って寝るだけの箱化しているようです。

モノづくりから得られる喜びを実感する

ものをつくる喜びを味わってみましょう。家庭菜園でも地域にある貸し農園でも作物をつくっていると、夏の水やりなど苦しいこともあります。収穫の喜びを味わえます。さらにそこにきた人たちとのコミュニケーションなど、ものをつくるのとは別の付加価値が生まれます。一人でもものをつくっていても同じことにぶつかります。わからないことを調べていくことで、同好者との出会いなどいろいろなことがついてくるはずです。

仕事にやりがいや生きがいを感じる

仕事の場合も同じことが言えるでしょう。やらされていると受動的に受けとめていると何も生まれてこないでしょう。仕事ですから苦しいこともありますが、能動的にやっていると、人との出会いの意味も変わってきますし、苦しさを越えて成し遂げた喜びも変わってくるはずです。

市民と積極的に交わる行政

行政も分業になって失ったものはないでしょうか。「うちの課には関係ないわ」です。すことが多くなっていないでしょうか。市民との接点のない課はありません。主体的に関われば市民との応対も変わるはず。その市民も変わるでしょう。その相互作用から文化の心を持ったシステムづくりをしましょう。それはまちづくりや文化の心を持った八尾づくりにつながるはず。す。

36. 文化と生活の関係を再構築する

「文化」「環境」と言えば、現代は生活とかけ離れた特別なことのように考えられています。しかし生活をしていることで「文化」「環境」とつながることによって、無理せず守れたり、育てたり、楽しめたりできるはず。す。

変わってしまった生活と社会

生産性・経済効率が優先された生活・社会になり、都会は個性を失って境目もなくつながっています。「町」は単に行政区分を意味しているに過ぎなくなりました。

エネルギーが薪や炭から石油や電気が変わり、里山（村に近く、生活の場に使っていた山）は手入れがされなくなり、人が楽しみで入る環境が失われています。

個人の生活も合理性を追求したためにパッケージングされた結婚式や旅行、レトルト食品や

インスタント食品、ブランド物などみんな同じになっているかのようです。犬や猫そして昆虫もスーパーのペット屋さんで買えます。夏休みの宿題に昆虫採集はほとんどなくなり、自然のなかで生きている虫は恐くて触れない子どもが増えています。大人も同じかもしれません。肉や野菜と同じ感覚で生き物が扱われ「死」に対して無頓着になっているように思います。

もう一度生活を捉えなおしてみよう

産業や経済が進んで便利になってなんでもお金を出せば買える時代になりましたが、便利ということから失ったものの大切さを考えてみましょう。「便利」は人を豊かにし生活に潤いをもたらすことをめざしていたはずですが、しかしあまりに「便利」を求めたためにコミュニケーションは希薄になり、汗をかきながらものをつくることは少なくなってきました。自分のなかの「便利」「合理的」と違うキー・ワードを見つけて生活してみると、きっと失ったものが見えるはずですが。

少し振り返って、今までの生活で「合理的」「便利」が長い時間の流れのなかで「非合理的」「不便」だったりします。環境の悪化が人の生活を駄目にしていくとしたらこんな「不合理」はないのです。

37. 原っぱが教えてくれる創造的な生活

一見何もなさそうな原っぱ。しかし、その空き地には創造性をかきたてるさまざまな要素が存在しています。新しい原っぱをつくり、創造的な生活を取り戻しましょう。

創造する遊び

原っぱには遊具などありません。でも、私たちは工夫をして遊んでいました。それは、与えられる遊びではなく、創造する遊びだったはずですが。

空間としての原っぱだけではありません。昔は新聞紙ひとつでも遊べたものです。こうした創造的な遊びによって、子どもたちの文化に関わる素養が磨かれていきました。

原っぱや創造する遊びが消えた

しかし、こうした状況は変わってしまいました。与えられる遊び方。そして、まちから原っぱが消えてしまいました。

効率を重視する社会では、原っぱは未利用地とみなされ、早く利用せよということになります。駐車場になったり、ビルになることだけが利用なのでしょう。

みんなが好きな時に自由に使える空間。そうした場所がなくなっています。

河内音頭の櫓を建てる場所も少なくなっています。

原っぱが欲しい

もう一度、原っぱが欲しい。遊具など何もなくても、空き地があれば自由に使える。そこから創造性も生まれるのです。

空間としての原っぱだけでなく、心のなかにも原っぱをつくりませんか。何もないなかで楽しむことを経験してみませんか。身近にきっと心を豊かにすることが見つかると思います。

38. 顔が見える社会を構築する

私たちの生活はさまざまなものやしくみで支えられていますが、それを実感することがむずかしくなっています。私たちが文化づくり、まちづくりに主体的に関わるためには、それら

をわかりやすいものにしていく必要があります。そのためには、社会のしくみを身近なものにしなければならないでしょう。

見えなくなった社会のしくみ

私たちの生活を支えてくれている社会のさまざまなしくみ。それを実感することがどれだけあるのでしょうか。政治、経済、環境…、私たちがお世話になっているはずのこうしたしくみは、あまりにも巨大で複雑なものになり、わかりにくいものになっています。

受け身の生活と希薄な存在感

そして、それは、私たちの生活を受動的にしてしまいます。私たちの意図や意志とは無関係に社会は動き、それに操られて生活しているのが現状ではないでしょうか。

こうした社会のなかでは、ひとりの市民の存在は小さなものとなり、私たちは無力感を感じてしまいます。「私には関係のないこと」「私ひとりが動いたって世の中は変わらない」こうした言葉が出る背景には、生活と疎遠になった社会があるはずです。

顔が見える社会を取り戻す

かつてはそうではありませんでした。一人ひとりの存在価値がきちんとあり、私たちがまちや社会を動かしているという実感があったものです。

こうした過去の社会は確かに因習もあったでしょう。うっとしい社会だったかもしれません。そうしたものを払拭すべく新しい社会は生まれたのですから、単に過去に戻れ、ということではありません。

しかし、今のままでいいのでしょうか。かつての社会とは違ったかたちで、もう一度顔が見える社会を再構築する必要があるのではないのでしょうか。

そのためには、しくみは小さいほうがいい。小さいしくみは実感でき、関わりやすいものです。みんなで力を合わせて構築する、人間の間尺にあった社会をつくりましょう。それが、文化的な社会やそのなかで営まれる文化的な生活につながるはずです。

経済のしくみも同じ。大企業は全国どこでも同じ物・同じ味をめざしています。地域に責任を持たずにすむシステムなのです。地域の生活に責任を持つことができるのは、お互いに顔が見えながら生産から消費まで可能な地域に根ざした小さな企業です。そのシステムをつくることにより八尾の個性や特色が生まれてくるのではないのでしょうか。

39. 便利な生活を見直してみる

私たちの生活は確かに便利になりました。しかし、便利さと引き換えに失ったものも少なくないのではないのでしょうか。便利さだけを追い求めるのではなく、生活の文化的な意味も考えてみましょう。

便利さだけでいいのだろうか

私たちの生活はたいへん便利になりました。しかし、便利さだけを追求しているだけでいいのでしょうか。

車は快適で便利な乗り物です。どこに行くにも車を使ってしまいますが、排気ガスで大気は汚染されています。細い道路にも車が入ってきて人が邪魔者扱いされています。そして交通事故のない日はありません。

便利なことがよいことだということで、インスタント食品やレトルト食品そしてまちにはコンビニエンス・ストアなどが氾濫しています。家にまな板や包丁が無くても生活できるよう

になりました。

便利さだけではない多様な価値を見出す

便利だからとすべてが自動販売機になってしまうと人間は言葉を使うことを忘れてしまうかもしれません。市場や個人商店は買い物だけを考えると不便で煩わしいことがあるかもしれませんが、会話ややりとりのなかから自動販売機の IC でつくられた声にはない何かがあるはずです。

レトルト食品を電子レンジで暖める。「チン」と言う電子音でできあがる。料理をするとまな板と包丁のあたる音。鍋のなかでもものが煮える音。味はそれぞれの家で少しずつ違って個性がある。どちらが豊かでしょうか。

市場や商店街は、やりとりのおもしろさや地域の人どうしのコミュニケーションなど、まちの個性に重要な多くの役割を持っています。もちろんコンビニエンス・ストアにはそれなりのコミュニケーションはありますが、日本全国同じような商品が並び個性を壊しています。便利さだけで考えず、目的以外の付加価値を見つけることで心豊かな生活ができ、まちは個性を持つのではないのでしょうか。

40. 道具は使い手の心の持ちようで価値が決まる

生活に便利のようにいろいろのモノが開発されまちに溢れています。それに頼ってしまうとコミュニケーションや創造のないまちになってしまいます。道具に使われず、うまく使うことによって心の豊かな生活になるはずです。

近代化はその内容や方法が問題である

近代化し便利になるのは時代の流れのなかで必然のことかもしれません。問題は、近代化する方法です。本来生活を豊かにするために生まれた道具も経済性や合理性を追求することに重きが置かれるようになり、逆に生活に潤いを失いつつあるようです。

道具は使い方を考え有効に活用する

たとえば、料理の場合。外食をしたり、スーパーで惣菜を買う。これで食事はすませられます。でも、こうした食事ばかりでは、どこかむなしくないのでしょうか。

もちろん、すべて料理をしている時間のないこともあるでしょう。だから使い方を考えましょう。「トントン」「グツグツ」「チン」を混ぜて使えば、時間も節約され個性も出せるようになるはずです。

道具を使うことにより生活にゆとりができ、家族の時間や趣味の時間、地域の活動にも参加でき心豊かな生活ができます。それを売り物にしてテレビなどからコマーシャルが流れてきます。

生活のリズムを変えようとしているのか、無理矢理に変わらされているのか考えることが大切です。気をつけていないと知らず知らず変えられてしまって、家に道具が溢れているだけになってしまいます。

道具を文化的にするのは人の心である

道具は使い方を間違えると凶器になってしまいます。道具を使って生活を「文化的」にするのは使っている人の心のゆとりであったり、豊かさで決まります。

41. 生活とつながる一貫システムをかたちづくる

生産・販売・消費が八尾市域や河内で完結すると生産者・販売者・消費者の顔がそれぞれに見え、ものをつくるはげみ、使う喜びが一体化し、生産と文化の融合した、安心して心豊かなまちになるはずです

分離する生産と消費

生産・流通・消費が分業の高度化や輸送時間の短縮化などにより、生産地域とは別の所の大きな卸売市場に集められ、そこからさらに消費地に運ばれて行き、生産と消費が何の関係もなく行われています。

八尾でも青果卸市場があり、そこから買ったものが個人商店や市場に並び消費されていました。現在、少なくなってしまったので、生産者が道の端で売ったりする直売以外は、ほとんどは大都市と同じように大きな東部市場などから買ってくる人が多いようです。

顔が見えることで得られる安心

無農薬や有機栽培の農産物や製品が生産者から直接送られてきて手に入る産地直送品に人気があるようです。それは生産者と消費者が離れていてもコミュニケーションがとれお互いの顔が見え安心感があるからでしょう。

個人商店などは地域の特産物や特色を出そうと思えば、生産者から直接買って販売することも可能だと思います。

消費が生産を変える

では消費者はどうでしょうか。テレビなどマスコミの影響で東京と同じものを知らず知らず買わされてしまっていないですか。

たとえば、ある野菜の直売店の話です。河内では「菜っぱ」といえば「しろな」だったようです。しかし消費者は、料理番組で「小松菜を使います」と言われると「しろな」でも同じ用途で使えるにもかかわらず「小松菜」を探して買いに行きます。それで店では「しろな」を置いても売れ残ってしまう。そのため、そこでは、昔ながらの「しろな」の生産を減らし、「小松菜」を多くつくるようになっていきます。このように、消費者が気づかないうちに生産を変えてしまっていることに気づきましょう。

手づくりが文化を創造する大切な要素だとすれば、そうした文化を支えるためにも、生産と消費の関係を見直し、文化を支える消費活動を行う必要があります。

42. 100年後のための明日を見つめる

時代は変動の時を迎え早く動いています。そんな時こそ長期の視点に立って自分の生活やまち、コミュニティを考えることで文化と密着した生活やまちが創造できるはずです。

まちや環境の変化

昭和30年代後半の高度経済成長からまちの様子は変わり、電車に乗ってまちを見ても境目が無く、どのまちも同じように見えてしまいます。しかし、全て個性が無くなってしまったわけではなく、地域を細かく見ていくとまだまだ昔ながらのまちなみや伝統・風習が残っています。

自然環境も同じように大きく変化しました。公害問題は地域のことから地球レベルまで拡大しています。車の排気ガスなど個人の生活を地球の環境にまで広げて考えなくてはいけなくなりました。

まちの変化とわたしたちの生活の変化は関わっている

まちも自然環境も大きく様変わりをしました。人の日々の営みから考えるといつのまにか変わったのかと思ってしまうのですが、振り返ってみると個人の生活も同様に変化して便利に慣れた生活をしています。

生活からまちの変化を見つめ直す

本当に豊かで住みやすいまちや環境でしょうか。どこかでなくしてきたものがあるように感じませんか。

史跡や文化財などは意識しないでも価値を認めたりできますが、普通のことや日常のことは少し意識してみないと見えてきません。子どものころや住んで間もないころに見た所は今どうなっているのでしょうか。観光気分で見に行ってみましょう。

長期的視点に立ったまちづくりを

日常の追われた生活のなかで、一度立ち止まって過去・現在・未来を自分の子ども・孫・子孫にとってこのまちは豊かで安全で住みやすいまちになっていくだろうか、後世に素晴らしいと思ってもらえるようなものを残せるだろうかと考えてみましょう。

まちは自然と同じようにゆっくり変わっていきます。しかし突然変わってしまうこともありまちは生きていることを感じます。市民も行政も一緒に、自然やまちのリズムに合わせて長期的な視点に立って、日頃から気をつけてまちを見たり、どのようなまちにしたいかの議論をすることが「まちづくり」にとって大切なことではないでしょうか。

43. 文化を活かすまちづくり

文化資源を活用したまちづくり。文化資源を活かすまちづくり。文化の心を持ったまちづくり。まちづくりを文化の面から捉えてみましょう。

歴史を活かしたまちづくり

久宝寺寺内町をはじめ、市内には伝統的なまちなみが各地に残されています。こうしたまちを歴史文化資源として位置づけることが必要でしょう。

確かに生活はかつてと様相が変わってしまいました。だから、こうしたまちなみをそのままのカたちで残そうとするには無理があるかもしれません。何を残し何を变えていくのか、継承の方法を十分に検討しながら、歴史性を大切にしたいまちづくりを考えていきましょう。

史跡や歴史だけでなく商店街やコミュニティの場として使える道路や公園など新旧取り混ぜてみたり、行政の施設を核にしたまちづくりも考えてみましょう。

地域資源を活用したまちづくり

玉串川沿い・長瀬川沿いなど八尾でも桜の名所はそこここにあります。また常光寺の河内音頭は全国にまで聞こえた八尾の資源です。まだまだ他にも資源があります。その資源と商店や商店街と連携を図ると地域振興とともに商業振興もできるはずです。

文化施設と一体となったまちづくり

プリズムホールをはじめとした文化施設では、さまざまな催しが行われます。たとえば、コンサート。コンサートへ行くとき、私たちは期待で胸弾ませます。また、コンサートが終了したとき、その余韻に浸りながら家路に向かいます。

文化施設と一体となったまちづくりでは、こうした「期待」や「余韻」が感じられる道づくり、まちなみづくりが必要となります。

人々の行動や気持ちを大切にしまちづくり、公共施設づくり。それこそが、文化の心を持ったまちづくりではないでしょうか。

ケーススタディー ー地域資源を活用する

このビジョンでは、文化振興懇話会での議論を43のキーワードとして第2章にまとめています。

しかし、懇話会では、「八尾の地域資源」についても、活発な議論がされ、具体的な提案へ広がり、発展していきました。第2章で語り尽くせない具体的な提案を、「ケーススタディー ー地域資源を活用する」にまとめました。

また、平成9年に行いました「八尾市 文化に関する調査」のなかで、「八尾で誇りに思われる人やもの、催し」についての結果もあわせて例示しています。しかし、これらが、八尾の文化資源のすべてではなく、もっとたくさんあります。

今後、身のまわりにある地域資源を再発見し、それらを活かした八尾の文化のまちづくりへとつなげていく「きっかけ」としていただけたらと考えています。

事例1 河内音頭を再評価する

河内音頭は八尾の歴史文化を代表する素材です。これからの河内音頭のあり方を考えるためにも、あらためて河内音頭について検討しましょう。

河内音頭をさまざまな角度から検証する

八尾は河内音頭の発祥の地だとか、メッカといわれますが、そのような意味のない一番争いをするのではなく、伝統芸能の一面を持ったり、その枠から飛び出して夏の風物詩であったり、市民も行政もさまざまな角度から検証することにより多様な河内音頭の活用が図れるはずです。

かつての河内音頭を継承する

古い音頭として、流し（常光寺）・恩智音頭（恩智）・ジャイナ（太田）が今に継承されています。テンポやリズムは現代の音頭とは違い遅くゆったりとしています。踊りも今の踊りのように変化があるわけではありません。保存会などもできているようですが、音頭取りも高齢になり行政のサポートなりが必要な音頭です。

ただ型にはめた保存ということではなく、地域の住民や行政がともに考え、柔軟な継承の仕方若者も参加できるようなことが考えられるはずです。

河内音頭の多様なかたち

百派千人といわれる現代の河内音頭は、時代の移り変わり、社会の動きによって現在聞くことのできる音頭に変化してきました。

さらに今も変化の途中にあります。北河内の音頭（江州音頭）は中河内よりかなりテンポは速くなっています。逆に南河内の音頭（泉州音頭）はゆっくりとしたテンポになっています。

自然なかたちで河内音頭を大切に

それぞれの自然の変化に委ねて、行政や音頭界以外が手や口を出さない方が生き活きとして時代を超えてつながっていくはずです。

北河内の音頭取りさんに聞くとお客さんに「河内音頭をやってほしい」と言われるそうです。テレビやメディアの影響で変えられてしまう可能性を持っています。

自然に変わっていくことはよいのですが、市民も地域の特徴を知りメディアに影響されない

で見守ることで、いつまでも夏の櫓を楽しみにできるはずです。

河内音頭は古い音頭のサポート程度で自然の変化に任せることでエネルギーあふれる世界がつづくはずです。

事例 2 山が近い利点を活用する

高安山は八尾市の緑の中心です。都会のそばにあり標高も 500m 弱の子どもから高齢者まで楽しめる山です。自然と歴史、まちづくりの視点高安山を再発見からも考えることができ、豊富な資源の活用が図れるはずです。

高安山を再発見する

ある他市の図書館員は「うちは自然しかなくて。八尾はいいですね、自然と歴史があつて」と言っています。八尾市に住んでいるとあたりまえになっていてあまり思いませんが、山の自然のなかに遺跡や史跡があることは特別なことです。市民も行政もこのことを理解して外から眺めているだけでなく、歩いて登ると高安山も活用する方法を見付けることができるはずで

みずからの興味に合わせて活動に参加してみる

市民活動で高安山を中心に行っている団体も多くあります。歴史をテーマにした会、自然観察や山の作業をしている会、トラスト運動をしている会、登山やハイキングを主体にした会、写真や絵を描いている会などもあると思います。きっかけとして自分に合った活動をしている会の行事に参加して高安山に触れてみましょう。人との交流や自然のなかで日常の疲れをいやして、生活の活性化が図れるはずで

生活者と利用者の接点を持つ

高安山の特徴を知り、生活している人とハイキングなどで楽しんでいる人との交流や接点を見つけましょう。

高安山は観光地のような山ではなく、生活の場でもあります。花の栽培を中心にした農業が営まれています。神立・大窪の山麓は農業振興地域に指定されています。当然私有地です。高安山はほとんど全部が私有地で、多くの地権者に分かれています。

山というとそのなかのものは誰のものでもないと思われがちですが、高安山では所有者がいます。枝を折ったりしない、ゴミは持ち帰るなどあたりまえのマナーを守るところから地元の人との交流ははじまります。

多様なハイキング道を整備する

現在ハイキング道は五つあります。自然観察や景色を見ながら家族連れで楽しめる山です。それぞれのハイキング道も違った雰囲気を持っています。

保全や整備の必要な道もあり、住民・市民・行政が実際に見たり経験したことを基に話し合っ

手をかけてこそ山は守れる

自然は手をつけないで自然のままにという声を聞きますが、高安山は原生林の山ではなく、かつては薪や炭をつくるために利用され、人の手が入ってこそ守られる山です。放置するとかえって生態系を壊すこととなります。

だからこそどのように手を入れるかが問題になってきます。現在は薪や炭をつくることもなく、山仕事をしている人の高齢化などにより放置されて荒れてきています。木の間伐や手入れをしている市民グループもありますが、山の手入れは生態系も考え長い時間をかけ少

つやる必要があります。

事例3 地域資源を活用する

河内音頭や高安山以外にも八尾には多くの地域資源が存在します。地域の資源をそれだけで見るのではなく、違うものとの連携を取れば地域の活性化は図れるはずです。

河内木綿を身近なものに

河内木綿についてはほとんどの人が名前を知っています。春には市民サービスコーナーで個人の好意で綿の種が配布されていて、他府県からも申し込みがあるようです。この種から栽培し実った綿を集めて河内木綿を織り市役所のロビーでも展示すれば、市民の手による木綿としてもっと身近に河内木綿を感じることができるはずです。

河内木綿もかつて河内一帯で織られていた産業のひとつです。今は伝統工芸となってしまったと言っているかもしれませんが、八尾市立歴史民俗資料館や河内各地の資料館でしか見れなくなっているのではないのでしょうか。

河内木綿は現在も織り続けられていますし、継承ということで教室なども行政・民間ともつくられています。ただ現代の木綿を手に入れることがほとんどできなくなっています。大手百貨店で手に入れることも可能ですが極端に減っています。八尾のなかで生産・販売・購入のシステムができると八尾の特色となるでしょう。

八尾ならではの今東光の評価を

今東光も八尾の文化の資源のなかで大きな位置を占めるひとつでしょう。いくつかの自治体でも著作などを収集しています。八尾の図書館も蔵書していますが、東光が八尾に住んでいたことを考えれば、書籍だけでなく親交のあった人々の聞き取りや、当時の八尾の風物など八尾でしか残せないものの収集や保存が、他にはない八尾のオリジナリティとして生きてきます。それを山本の図書館で展示すれば、天台院の地元として素晴らしいものになるはずです。

空港を活かす

八尾空港は日本の有数な小型機専用飛行場であることの利点と活用を考えましょう。飛行機も交通機関のひとつですがあまりなじみがなく、空港も閉ざされた空間ですから、考えにくく発想もわいてきません。

行ってみると家族連れが飛行機の飛ぶのを見ていたりします。建物も高さ制限があり、まちなかで最も空の広い場所でしょう。飛行機の操縦の練習で他府県からも人が定期的に来ています。そのような人も交えて交通手段としてではなく、まちづくりや地域資源として話合うと発想が出てくるはずです。

事例4 地域資源を活かしたまちづくり

自分の生活の範囲にどんな資源があるかを知り、わざわざでなく生活に文化を取り入れ、地域の人とコミュニティづくりに役立てていけば心豊かな生活が送れるはずです。

歴史資源を現代に活用する

歴史だけで考えるのではなく、新旧の施設・自然・公共の施設など時間・質の違いを越えて接点を見つけ出せれば人の集まりも多くなり、点は線に、線は面への広がりが可能になるはずです。

河内音頭の櫓をコミュニティの場に

主催が自治会や子ども会の河内音頭の櫓が多く建ちます。地域の人たち、老若男女の集えるコミュニティの場として活用しましょう。

櫓を回ってみると、それぞれ雰囲気も違い、進め方にも違いがあります。それはとにもかくにも、それぞれ関わっている人たちの個性や地域の個性です。

その個性を大切にして地域の人たちの世代・性別を越えコミュニケーションの場となるように、長く住んでいる人も新しく住むようになった人も汗をかきながら、苦しさも楽しさも共有することで、より素晴らしいコミュニティができるはずです。

歴史を活かしたまちづくりを

史跡や歴史・伝統的なものを核としたまちづくりを考えてみましょう。

久宝寺寺内町のまちづくりはすでに市民と行政の協働によって行われています。寺内町・環濠集落は久宝寺以外でも大信寺寺内や萱振環濠集落など最初から面の広がりを持った場所があります。寺内町以外でも最初から面として捉えることのできる場所があるかもしれません。史跡や歴史だけでなく商店街やコミュニティの場として使える道路や公園など新旧取り混ぜてみたり、行政の施設を核にしたまちづくりも考えてみましょう。

地域資源を活用した産業振興

玉串川沿い・長瀬川沿いなど八尾でも桜の名所はそこここにあります。また常光寺の河内音頭は全国にまで聞こえた八尾の資源です。まだまだ他にも資源があります。その資源と商店や商店街と連携を図ると地域振興とともに商業振興もできるはずです。

高安山には遺跡・史跡が多数点在しています。自然と農業をドッキングすれば高安山全体に結ぶことは可能になるはずです。

公共施設を使いやすく

公園や、文化会館・生涯学習センター・コミュニティーセンター・図書館といった行政施設など、まちには人の集まることのできる機能を持った施設がたくさんあります。

それらを市民と行政とで、より市民の集いやすくなるように話し合っていけば広がりを持つはずです。

第3章 文化的まちづくりの推進のために

このビジョンの策定は市民と行政の協働で進めました。公募で集まった文化振興懇話会での議論を中心に、若者による「ゴーゴーYAO トーク」、拡大懇話会、市民アンケート、文化団体アンケートなど、広く市民の意見を集めて策定されたものです。

議論の到達点であるこのビジョンを、さらに具体化していくためには、さらなる議論を積み重ねるとともに、具体的な施策として展開していくことが求められます。

本章では、ビジョンの実現化のための推進方策について述べたいと思います。行政や市民、それぞれがそれぞれの立場のなかでできることを積極的に言い、それを積み重ねることによって文化振興を図ります。ビジョンを実現していくためには、まちづくりの主人公たる市民と行政職員一人ひとりが、それぞれの責任と役割を認識し、積極的・主体的に行動することが必要です。

協働の文化づくり、まちづくりをめざして、さまざまな施策が展開されることが望めます。

1. 文化のきっかけづくり

文化のすそ野を広げていくためには、文化の心を持った人づくり、子どもづくりが必要です。

市民一人ひとりが気軽に文化に触れられ、文化活動に参加できるよう、そのきっかけづくりを行います。文化活動に気軽に参加できる機会づくりを行うととともに、参加の呼びかけにつとめます。また、家庭や地域活動、学校教育などを通じて、地域を歩き、地域の歴史や自然などを知り、地域に触れる機会の拡充を図ります。

○文化活動への参加を広く呼びかけます

- ・身近で気軽に参加できる文化活動を企画し実施します
- ・さまざまな情報媒体を使い文化活動への参加を広く呼びかけます
- ・わかりやすい情報づくりにつとめます

○地域や文化を学ぶ機会をつくります

- ・地域を知り、地域に触れる機会をつくります
- ・文化や自然に触れる機会をつくります
- ・学校教育のなかで地域文化についての素養を養います

2. 文化活動の促進

現在、市民主体で展開されているさまざまな文化活動をさらに発展させ、広がっていくよう、みんなで支援していくことが大切です。活動の場所や資金、広報活動など、活動の促進のために必要な支援方策を検討します。

○市民の文化活動を支援するしくみづくりを行います

- ・公共施設などを文化活動の拠点として利用しやすくします
- ・市民が主体的に行う文化活動に対する資金援助のしくみを検討します

3. ネットワークづくり・仲間づくり

文化活動の活性化を図るためには、さまざまな分野で活動している市民や団体が交流する場や機会づくりを進める必要があります。そのため、文化会館や生涯学習センター、コミュニティセンター、学校などの公共施設を有効に活用し、ネットワーク化を進めていきます。また、交流の観点からは情報のあり方も検討しなければなりません。情報を発信したい人と受信したい人を結びつける情報システムの充実が必要です。市政だよりなどの既存の情報媒体に加え、コミュニティFM放送やCATV、インターネットなど、情報化の進展に伴った新たな情報媒体づくりにつとめます。また、コミュニティボードや地域文化情報誌など身近で気軽に利用できる情報媒体づくりも進めていきます。

○文化活動の情報発信を活性化します

- ・文化活動に関する情報を発信するため、多様な情報媒体づくりを行います
- ・文化情報の媒介役をつくります

○市民活動をつなげるため交流の機会や場をつくります

- ・交流の場として公共施設の活用を図ります
- ・媒介役や情報拠点として文化振興事業団や市民自治センターを活用します
- ・市民活動の交流拠点として文化振興懇話会（仮称）の設置を図ります

4. 文化の心を持ったまちづくりの推進

文化的まちづくりを推進するためには、あらゆる分野で人や地域資源を大切にし、生活者の視点を取り入れたまちづくりを進める必要があります。各種の施策を文化的な視点から見直すとともに、文化資源の活用を図りつつ文化を創造するまちづくりを展開します。まちづく

りのさまざまな分野に、文化の心を取り入れ、人にやさしい文化の薫るまちづくりを推進します

○まちづくりの文化的価値を考えるシステムづくりを行います

- ・行政の文化化を図るシステムづくりを行います
- ・まちづくり全般にわたって文化の観点から評価を行うしくみを検討します

○市内に存在する文化資源の保全・継承・活用を図ります

- ・現存する文化資源の把握につとめ、活用方策を検討します
- ・文化資源をネットワークし、点から線、線から面へ広げていきます

○まちづくりを新たな文化資源の創造として位置づけ、文化の薫るまちづくりを推進します

- ・共に生きる心を持った人づくり・まちづくりを推進します
- ・文化の薫るまちづくりの一環として都市景観の創造につとめます
- ・人にやさしいまちづくりを推進します

5. 文化的まちづくりを支えるしくみづくり

文化的まちづくりを支えるためのさまざまなしくみづくりが大切です。たとえば、文化の心を持った個人と個人をつなぐコーディネーターや先導的役割を果たすオピニオンリーダーが必要です。さまざまな機会を通して、コーディネーターやオピニオンリーダーを発掘、データベース化を図るとともに、その育成を図ります。また、行政内部にも文化の心を持った専門家を養成したり、文化行政を推進するための組織づくりを行います。さらに、こうしたしくみを位置づけるための条例を検討します。

○文化を支える新たな専門家を養成します

- ・文化のコーディネーターを養成、発掘し、文化振興の核として位置づけていきます
- ・文化施設における企画を担当する人材を養成します

○文化行政を総合的に推進し、文化的まちづくりを調整する組織づくりを行います

○文化振興、文化的まちづくりに関する条例を検討します

6. 協働・支え合いのまちづくり

ビジョン策定時における議論をさらに継続し、深めていくため、市民と行政が協働し文化づくり、まちづくりを推進するためのしくみを継続して検討していきます。

○市民主体の文化づくり、まちづくりのためのしくみを検討します。